

誰でも楽しめる博物館を目指して ～西都原考古博物館におけるユニバーサルデザイン～

当館では、2004年春の開館時点から、全ての人々が利活用できる「ユニバーサルデザインの実現」を目指してきた。

様々な取り組みの中で特筆するものとして、展示では「常新展示」と「オープン展示」があげられる。固定化された展示は、資料の持つ多様な声（情報）を押し殺すことにつながる。また、施設・整備では「音声ガイドシステム」と「触察ピクト」がある。これらの詳細については、過去の研修や講座等で取り上げてきたが、開館10周年を迎えるにあたり、今一度基本に立ち返り、全ての職員・ボランティアスタッフが確認しておく必要がある。今後の研修でも取り上げる予定であるので、この紙上では割愛するが、当館のユニバーサルデザインの取り組みのいくつかは全国共通のものではなく、当館オリジナルなものであるため、これらを広く浸透させ、県内、国内、そして世界に発信し定着させていくことも重要な任務であると考えている。

施設や設備を充実させたとしても、それらはあくまで「道具」であり限界があることを認識しなければならない。この世に存在する「マニュアル」が、全ての事象の解決策ではなく「対処の基本」であるように、誰でも楽しめる博物館を実現するには、最終的には人的対応が基本である。

当館のユニバーサルデザインについても、全ての人に100%対応することは不可能であることを認識し、人によるアテンドを前提とした上で、最大公約数的な整備を行った。また、設置時が完成ではなく、運用する中で見えてくる課題に取り組むこと、常に改善を続けることが重要である。

最後に、ユニバーサルデザインの実現にとって最大のバリアは、人の心の中にある閉鎖的な体質や考え方である。このことを認識し、広く開かれた検証と検討、改善の継続こそが最も重要である。

(東憲章)



触察ピクト



音声ガイドと触れる展示